

# 博士課程教育リーディングプログラムフォローアップ報告書(平成24年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

|  |                      |       |        |
|--|----------------------|-------|--------|
| プログラム名称  | グローバル環境システムリーダープログラム | 申請大学名 | 慶應義塾大学 |
| 申請大学長名   | 清家 篤                 |       |        |
| プログラム責任者   | 真壁 利明                |       |        |
| <p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本プログラムは、平成 25 年度から学生募集が始まるため、現在は「助走段階」であるものの、意見交換を実施した履修希望者は、問題意識や新たなプログラムに対する期待も具体的であり、きわめて意欲的で頼もしかった。</li> <li>後期博士課程必修科目の環境情報システム構築法、グローバル環境政策特論、大規模環境システム構築法、環境技術政策特論については、既にシラバスが準備されている。</li> <li>全体としては、順調に準備が進んでいるように見受けられる。</li> </ul> <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>メジャー（主専攻分野）の研究科とクロスさせてマイナー（副専攻分野）の選択を義務付けており、どの程度機能するのか、今後の成果が期待される。</li> <li>3 つのキャンパスや連携先機関を遠隔コラボレーション・システムで結び、学修、研究支援を行うこととしているが、キャンパスの空間的な分離という弱点をどこまで補えるのか、有機的に機能するかどうか今後の進捗を見守りたい。また、遠隔コラボレーション・システムを利用した海外とのやり取りについて、特に欧米との場合には、時差をどのように克服するのか工夫が必要である。</li> <li>政策・メディア研究科と理工学研究科が対等の関係でグローバル環境システムを創出するリーダー育成を担う計画だが、政策・メディア研究科主導との印象を受けた。理工学研究科の中でも、ハードな分野の教員や学生にとって、本プログラムのメリットや誘因が必ずしも明確ではないように見受けられる。また、本プログラムについては、両研究科の全教員に関わってほしいとのことだが、中心的に関与する教員と、周辺的に関与する教員との負担等がアンバランスになっていることが危惧される。</li> <li>両研究科の協働による学位につながる体系的な教育プログラム（学位プログラム）であるためには、サーティフィケートではなく、公募要領の申請要件に沿って、当該学位に相応しい専攻分野の名称を学位に付記するか、学位記に学位プログラムの名称を付記することが必要である。</li> <li>アゴラ（教員間、専門家による議論の場（FD））は、年 2 回しか計画されておらず、開催回数の増加等の充実が必要である。</li> <li>学位取得後の進路開拓について、更に意欲的な取組が期待される。特に国際機関・国際研究所へのキャリアパスが、今後どの程度開かれるかに、このプログラムの成否がかかっている。</li> </ul> |                      |       |        |